

クビレオゴノリの増養殖試験Ⅲ

ーコレクターの中間育成による垂下養殖ー

専門技術員 瀬 底 正 武

1. 目 的

天然オゴノリは南部地区では、糸満市潮平から豊見城村与根にかけて生育がみられる。生産量は、昭和59年度の21トン进行ピークに年々減少し、現在では、1トン程度の生産にまで落ち込んでいる。(オゴノリ関連資料参照)

中部地区では、金武湾に面した、具志川市、与那城の浅海域にかけて生育がみられるが、漁業生産に結びつけるほどの生産量ではない。一方、北部地区では、羽地から屋我地、今帰仁村古宇利にかけて生育が顕著である。生産量は年間10~15トン程度で近年は減少傾向にあり、増養殖に向けての技術の確立が急がれていた。そういった観点から、昭和62年度から技術改良試験を導入し増養殖技術の確立を図るべく、これまで同試験を実施してきた。平成元年度は、中間育成(育苗)を実施することにより、果胞子の発芽が促進されることが明らかになったので、その概要を報告する。尚、本試験の詳細は、平成元年度技術改良試験報告書において(別刷)報告したので、ここでは、目的と要約だけを記す。

2. 要 約

- 1) クビレオゴノリの集約的な養殖を行なうこと

を目的として、コレクター採苗による垂下養殖試験を実施した。

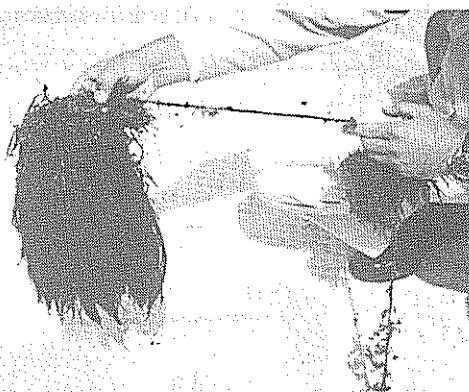
- 2) 果胞子付けしたコレクターの長期保存は、沖出し後の垂下養殖の段階で芽出しが非常に悪いことが分かった。

- 3) コレクターは、採苗と同時に沖出し、中間育成し育苗することにより発芽が促進されることが分かった。

- 4) オゴノリの養殖では、中間育成はもっとも必要な段階であり、そのことにより養殖生産の安定が図られる。

- 5) 果胞子付けしたコレクターは、継続2年間使用可能であることが調査の結果明らかになった。

- 6) 糸満地区、名護地区において漁場環境調査を実施した結果、栄養塩濃度をTOTAL-Nでみると、育苗、養殖漁場とも注目すべき値はみられなかった。



オゴノリ採苗から養殖までの手順

- (1) 母藻の選定（囊果形成藻体の確保）→(2) 放出促進のための干出処理→(3) コレクターの選定準備、貝殻、サンゴ類（人工基質として焼カワラ検討したい）→(4) 果胞子付開始（母藻投入後7日～10日間）→(5) 育苗の実施（漁場にて中間育成芽出しまでの5ヶ月間）→(6) 垂下養殖（11月以降）→(7) 収穫（2月以降～5月頃まで3回可能）

** 元年度採苗し収穫したコレクターが2年度も順調に生育している。（海中での垂下保存及び育苗地での保存）

1. 採苗基コレクター（ヒオウギ貝殻及びサンゴの骨格使用）の準備
2. 囊果（種袋）形成藻体の採取（母藻として使用）
3. 母藻は、放出促進のため干出処理を行なう（4～5時間）
4. コレクターを採苗タンクに敷つめたあと、母藻をコレクター上面に均一になるよう投入する（照度は5,000 LUX以上蛍光灯使用）
5. 採苗期間は7日～10日間で採苗、保存期間中は通気を行なう。
6. 沖出し後、順調に生育すれば80日～90日に第1回目の収穫ができる。2回目以降は1月間隔で期間中3回可能である。
7. 一連当り、1.5 kg生産できる。3回生産で4.5 kg可能

** 施設費等除く、生産量を単純試算すると（500連×4.5 kg）×700円（生）＝1,575,000円と施設設置後の2年目以降から徐々に連数を増やして行けば着業組合せのメニュー化が図られよう。（乾製品にすると、kg当たり2,500～3,000円）

〔養殖方法：オゴノリ延縄式垂下養殖〕



図ー1：貝殻コレクターに着生、生育するクビレオゴノリの垂下連

表-1: 採苗及び保存状況

測定月日 (旬)	水 温 (°C)	比 重 (15)	照 度	備 考
6 月	上 27.2	24.5 ~ 25.5	4500 ~ 5500LUX	名護地区は、採苗終了と同時に一部の連沖出し (育苗)
	中 25.6			
	下 26.3			
7 月	上 27.4	24.5 ~ 25.5	4500 ~ 5500LUX	
	中 28.0			
	下 27.2			
8 月	上 26.5	23.5 ~ 25.0	5,000 ~ 12,000LUX	糸満地区は、保存3ヶ月目に雑藻類の繁殖により沖出し (育苗)
	中 27.8			
	下 27.5			
9 月	上 27.0	23.5 ~ 25.0	5,000 ~ 12,000LUX	
	中 27.4			
	下 25.6			
10 月	上 23.9			名護地区、保存全コレクター沖出し垂下養殖に入る。
	中 —			
	下 —			

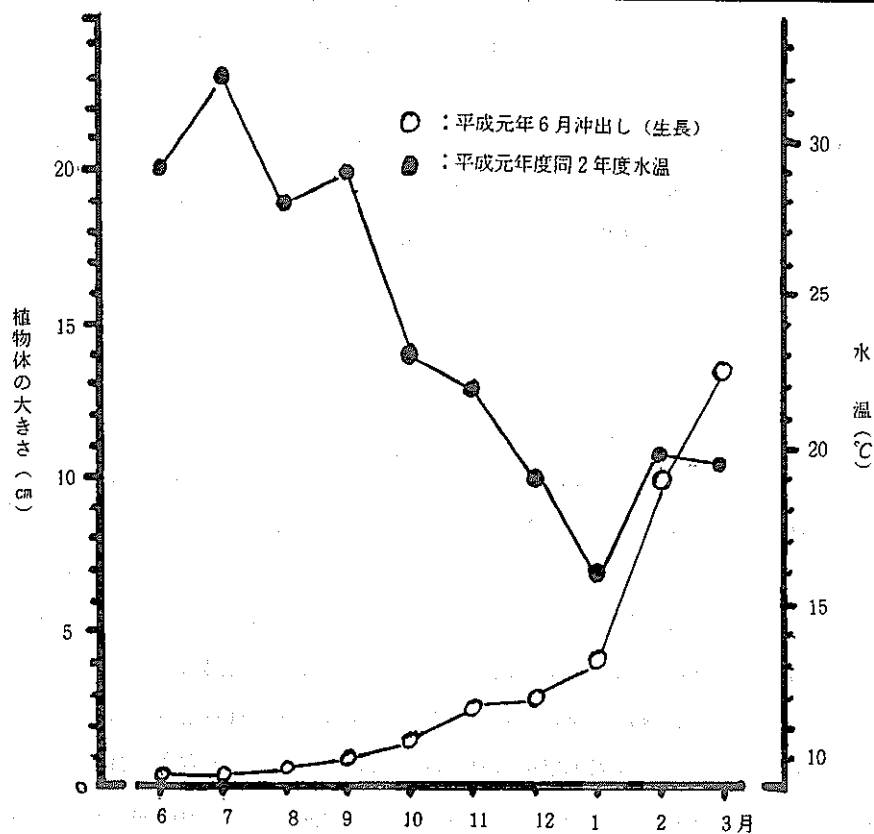


図-2: クビレオゴノリの生長と水温